

幼児期から児童期における 子どもの思考の共有・深化に関する研究

細野 美幸（短期大学部初等教育学科・准教授） 小泉 裕子（短期大学部初等教育学科・教授）
真宮 美奈子（児童学部児童学科・准教授） 幸喜 健（短期大学部初等教育学科・准教授）
関川 満美（短期大学部初等教育学科・講師）

目的

OECDによるPISA型調査の結果から、日本の子どもの問題解決に対する意欲の低さが指摘され（OECD, 2013）、多くの子どもが複雑な問題に粘り強く取り組むことを避ける傾向にあることが明らかになった。しかし、社会のグローバル化が進む中、人々の価値観やツールも多種多様となり、容易に解決可能な出来事だけに対処するわけにはいかない現状になりつつある。日常生活の様々な問題や葛藤場面について自分なりに思考し、考えを深め、発展させていく力を育むことは、幼児期・児童期の教育に求められる重要な課題であると言える。

ヴィゴツキー（Vygotsky）は、発達理論「発達の最近接領域」において、子どもの発達を促すものとして他者との関わりが重要であると述べているが（ヴィゴツキー, 1934/2001）、日本の幼児教育・保育に関する研究からも、青年期と異なる幼児期独特の思考力の発揮の仕方として、やはり「人との関わり」が重要である可能性が示されており（内田・津金, 2014）、特に協同活動における子ども同士の話し合いや保育者の関わりが幼児の思考の深化を促すことが示されている（佐藤, 2018）。一方で、児童期に入ると子どもの社会性・協調性がいったん低下することが示されており（田村・荒牧, 2012）、幼児期に見られた人との関わりや協同活動の質が変化する可能性がある。幼児教育から小学校教育への円滑な接続が重視されている中、幼児期から児童期への移行に伴う人との関わりや協同活動の変化が思考力に与える影響について検討し、保育者・教師の関わりの実際についても明らかにすることで、より良い指導・援助や接続の形を検討していく必要があると考えられる。

そこで、本研究では、幼児期から児童期を対象に、子どもが思考力を発揮する時に仲間あるいは保育者・教師との間にどのような相互作用が起きているのかを調べ、その相互作用の特徴が加齢に伴いどのような発達の变化を示し、そして、「人との関わり」のどのような側面（要因）が子どもの思考力の発達に影響を与えるのかについて明らかにする。

研究1では、幼児期・児童期の子どもを対象に、求められる思考タイプによって子ども同士の関わりに違いが生じるか否か、また、その関わり方に年齢による差が生じるか否かについて、実験的手法を用いて明らかにする。研究2では、特に協同的活動を取り上げ、保育者を対象に、実際の保育の現場では協同的活動と子どもの発達の関連性についてどのように捉えられているのかについて、質問紙調査を用いて明らかにする。

研究1：子どもの思考の変容に関する実験

1. 実験参加者

5歳児・7歳児（就学児） 合計約80名（予定）

2. 材料

以下の2つのタイプの課題（①②）を用い、参加する活動の内容によって、子ども同士の関わり方、コミュニケーションの内容、活動の結果に違いがみられるか否かを検討する。

①「創造性課題」：創造的思考を求める課題。可塑性のある素材（粘土や折り紙等）で自由な作品を作るよう求めるものを予定している。

②「収束性課題」：収束的思考を求める課題。解が一つに収束するものであり、見た絵画の内容を再生するよう求めるものを予定している。

3. 手続き

実験参加者を「2人組条件」「1人条件」に分けて実施する。1人条件では、参加者1名に対して創造性課題および収束性課題に取り組むよう求める。2人組条件では、参加者2名にペアで参加してもらい、それぞれの課題に「二人で一緒に」取り組むよう求める。撮影されたVTRから、発話データを起こし、課題の遂行過程と2者間のコミュニケーションのタイプの関連性について分析する。

4. 現状報告

2020年初頭に新型コロナウイルスの感染が急拡大したことに伴い、同年3月、協力園との協議により、本研究の実験は実施直前に中断・延期された。協力園との調整を進め、時機を見て再開する予定である。

研究2：保育者の意識調査

1. 調査対象者

予備調査：保育者8名（保育士）

本調査：保育者400名程度（保育士・幼稚園教諭）（予定）

2. 材料

子どもの協同活動に関して、保育の中で感じていることを記入するよう求める質問紙を用いる。協同活動が子どもの発達に影響を与えると感じるか、協同性がいつ頃発達し始めると感じるか、また、自身の保育の中でどのように協同活動を実践しているのか等について、回答を求める。子どもの発達に与える影響については、イギリスの保育の質の評定尺度「ECERS-E」（秋田・佐川，2011；Sylva, Siraj-Blatchford, & Taggart, 2011）をもとに、保育に関連の深い子どもの能力をピックアップし、その中から特に影響を与えられる能力を選ぶよう求める。質問項目は合計9（選択式5項目および自由記述式4項目）である（具体的な質問項目はTable 1に示した）。

3. 方法

質問紙調査をインターネット上で実施する。調査目的に関して事前説明を行い、協力の同意を得られた場合にのみ回答を求める。調査の実施にあたり、情報機密性の面で安全性の高いSSL形式の暗号化を行うシステムのアンケートアプリケーション「Questant」を用いる。また、回答者の氏名など個人を特定できる情報の記入は求めない。

Table 1 質問紙調査で用いる質問項目と内容

項目	質問内容	形式	
1	保育をされてきた経験の中で、年齢的にいつから協同的な活動を行うのに適切であると感じるか教えてください。	選択式	単一選択
2	これまで保育をされてきた中で、協同的な活動の実践に取り組まれたことはありますか。	選択式	単一選択
3	【Q2で「はい」と回答された方のみ、ご記入ください】何歳児のいつ頃に行われましたか。	選択式	複数選択可
4	【Q2で「はい」と回答された方のみ、ご記入ください】これまで実践されてきた協同的な活動の例と年齢クラスを教えてください。	自由記述	
5	協同的な活動を行うことが、子どものどのような能力の発達に影響を与えると感じますか。影響を与えると感じるものを全て選んでください。	選択式	複数選択可
6	Q5でご記入いただいたもの以外に影響を与えると感じるものがあれば、お書きください。	自由記述	
7	保育者として協同的な活動を促すためにどのような関わりが重要だと考えますか。ご自分の考えをご自由にお書きください。	自由記述	
8	子どもの協同的な活動を促すために環境面において工夫されていることがあればご自由にお書きください	自由記述	
9	保育者としてお仕事されてきた経験年数（離職期間がある場合は合計）をご回答ください。	選択式	単一選択

4. 現状報告

現役保育者8名に対して予備的調査を行った（合計経験年数1年以上3年未満2名、3年以上7年未満3名、7年以上3名）。データ数が少ないため統計的分析は未実施ではあるが、集計結果をTable 2・3・4およびFigure 1・2に示した。

- ①協同的活動を展開した経験の有無：8名中7名が実際に保育の中で協同的活動を展開した経験があり、1名のみ経験がなかった。
- ②協同的活動を展開する年齢：適切だと考える年齢と、実際に協同的活動を展開したことのある年齢とは必ずしも一致しておらず（Figure 1）、より早い年齢・時期から可能であるという実感が持たれている可能性が考えられた。あるいは、質問項目において「年齢的にいつから協同的な活動を行うのに適切であると感じるか」と尋ねた結果として、適切な年齢というより、むしろ、活動の萌芽が見られる時期として回答者に受け止められた可能性もあることから、本調査においては質問項目の記述を修正する必要があると考えられる。
- ③協同的活動の実践例：協同的活動の実践例に対する具体的な回答内容を、回答者の年齢層別に示した（Table 2）。
- ④協同的活動によって子どものどのような力が育まれると考えるか：「協調性」「社交性」が最も多く、次いで「創造力」「想像力」、さらに「推論能力（考える力）」が影響を受ける能力として挙げられた（Figure 2）。
- ⑤協同的な活動に対する援助：協同的活動を展開するにあたり、関わり方において、および、環境構成において心掛けていることについての具体的な回答内容を示した（Table

3・4)。直接解決を指示するような関わりを行う回答は見られず、「足場かけ」や見守りを心掛けた援助、および、場や時間の確保を目指した環境設定を行っていることがうかがえる。

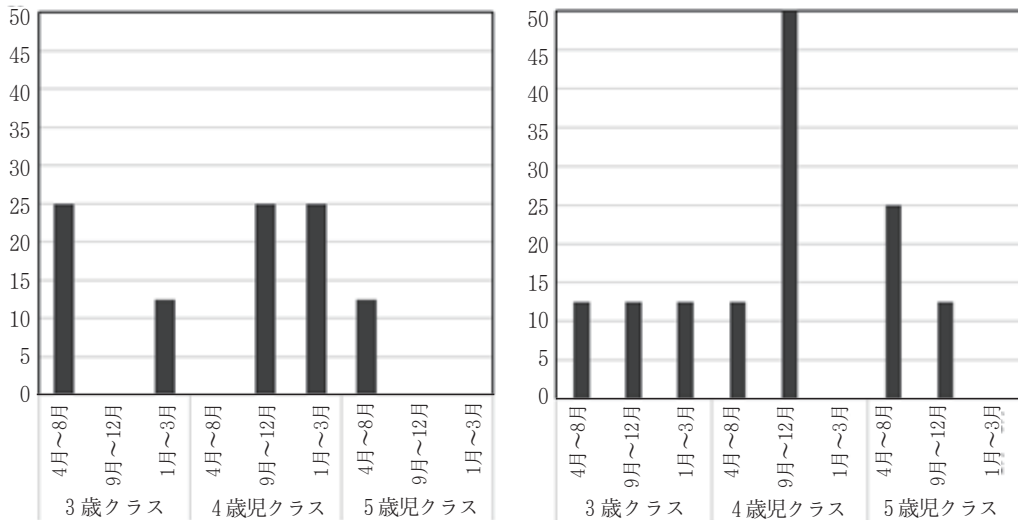


Figure 1 協同的活動を展開する年齢（適切な時期（左図）および実際の時期（右図））（%）

Table 2 協同的活動の実践例

実践例	回答者の年齢層
生活発表会に向けて話し合いの場を設け、どんな話がいいのか、子どもたちがしたい結末にするにはどのようなストーリーにしたらいいのかを相談し話し合った(4歳児)	20~24歳
子どもの眩きに耳を傾けてそれに対してみんなで作る作業を行った。	20~24歳
劇遊び 4歳児11月ごろから	25~29歳
製作物を作る際に皆で同じものを作り廊下に飾り出した。3歳児クラスの8月	25~29歳
お店屋さんごっこ 4歳児9月ごろから	25~29歳
楽器の練習が始まり、全員で合わせることの大切さや練習の大切さを伝えて取り組んだ。5歳児秋	25~29歳
4歳9月から楽器遊びや劇遊び、自然物を使った数遊び	30~34歳
3歳1月からお店屋さん等を子供達も中心に	30~34歳
4歳9月から楽器遊びや劇遊び、自然物を使った数遊び	30~34歳
発表会の劇遊び	45~49歳
作品展。4.5歳児	45~49歳

(複数記述可)

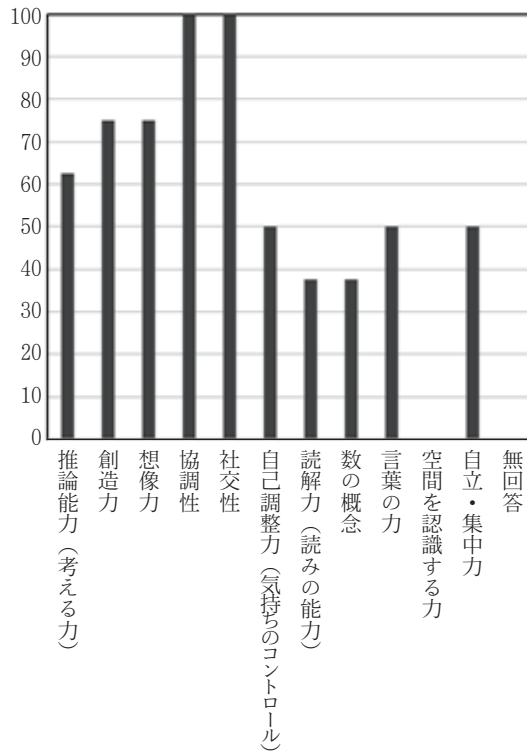


Figure 2 協同的活動が影響を与えると思われる子どもの能力 (%)

Table 3 協同的活動における関わり方

援助にあたり心掛けていること	回答者の年齢層
結論をすぐに伝えない。	20～24 歳
年齢によって異なるが問いかけに対してなんでだと思う？という質問返しをしてみる。	20～24 歳
子どもたちとの日々のコミュニケーションから、興味があることを知ったり気づきを共有すること。	25～29 歳
さまざまな子ども (友達) と関わり、言葉を使って想いを伝え合えるように関わる	25～29 歳
何でもかんでも口出しするのではなく、子どもたち自身で考えてもらう	25～29 歳
答えを導き出すのではなく、考えられるような言葉がけや見守り	25～29 歳
見守り、子供の意見を尊重する、全体が話せるように場合によっては保育士が率先し中心となって話しやすい雰囲気を作る	30～34 歳
大人の考えや意見を前面に出さず、子どもの思いを受け止める。手助けが必要な場合は、全てを援助するのではなくヒントを与えたり解決の足がかりだけを知らせるようにする	45～49 歳

Table 4 協同的活動における環境構成

環境構成にあたり心掛けていること	回答者の年齢層
今のところ特になし	20～24 歳
様々なことを目で見えて考えられるように廃材や素材や材料を置いといた	20～24 歳
子どもたちの考えを聞く場	25～29 歳
異年齢で活動を行い、役割を把握して取り組めるようにする	25～29 歳
製作物の掲示	25～29 歳
特にそういったことをおこなったことはありません	25～29 歳
他クラスと活動が重なる時間がないようにする、刺激が多い場合はラティスで区切る、場所を変える	30～34 歳
作品を自由に作れるように、素材を使いやすく豊富に置くようにしている	45～49 歳

今後の課題

来年度は、時機を見て実験を再開し、かつ、並行してインターネットによる質問紙調査を継続していく予定である。また、研究 2 では保育者を対象にした意識調査を行っているが、幼児教育から小学校教育への円滑な接続と思考力の発達について検討するためには、小学校教諭を対象にした意識調査も行っていく必要があるだろう。

※本研究は鎌倉女子大学倫理審査を通過：審査番号鎌倫-19008・鎌倫-20018

引用文献

- 秋田喜代美・佐川早紀子（2011）. 保育の質に関する縦断研究の展望, 東京大学紀要, 51, 217-234.
- OECD（2013）. Country-Note Programme for International Student Assessment (PISA) Results from PISA 2012. (<https://www.oecd.org/pisa/keyfindings/PISA-2012-results-japan.pdf>)
- 佐藤康富（2018）. 幼児期における思考力の深化過程に関する研究 鎌倉女子大学紀要, 25, 89-99.
- 田村徳子・荒牧美佐子（2012）. 子どもの学びの育ち ベネッセ次世代育成研究所幼児期から小学 1 年生の家庭教育調査報告書, 26-45.
- 内田伸子・津金美智子（2014）. 乳幼児の論理的思考の発達に関する研究—自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる— 保育科学研究, 5, 131-139.
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松（訳）(1934/2001). 思考と言語 新読書社
- Sylva, K., Siraj-Blatchford, I., & Taggart, B. (2011). The Four Curricular Subscales Extension to the Early Childhood Environment Rating Scale? (ECERS), 4th Edition with Planning Notes. (平林 祥・埋橋 玲子（訳）(2018). 新・保育環境評価スケール 3 〈考える力〉, 法律文化社.)